

# 令和2年度編入学試験問題

## 小論文

### (国際地域学科地域教育専攻)

#### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 「問題」は1ページが白紙です。2ページから4ページが問題本文と設問です。
- 3 解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
- 4 解答は指定された解答用紙に記入すること。
- 5 受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。
- 6 解答は横書きとし、指定された字数にまとめること。
- 7 解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。
- 8 試験中に問題紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。



**問題** 次の文章を読んで設問に答えなさい。

教育というとすぐに浮かぶイメージは、教師がいて、教師と距離をおいて向き合う形で生徒がいて、教師が教育内容をことばによって生徒に送り込む、という場面である。つまり「とりたて指導」の場面である。これは、(中略) 教え込みを避ける教育やしつけの仕方には当てはまらない。

そこで、教育やしつけの仕方にとりたて指導による「教え込み型」(instruction model) のほかに、もうひとつ、「しみ込み型」(osmosis model) を考えることができるだろう。

「教え込み」は、基本的に子どもは教えられることによって学ぶという前提に立つ。教える者と教えられる者とが向き合っの意図的な教授である。そこでは「教える者」(教師) と「教えられる者」(学習者) の役割がはっきり分かれて存在することが前提になる。教える者は、そこで必要とされる知識や技能を持っており、また教えるためのカリキュラムを持っている。教えられる者はその知識や技能を持っていないで、それを獲得することを必要としている。その落差が両者の間に権威と受容の関係を生ずる。

このように異化した両者の間を取り持つのは、言語による伝達である。教師はまず学習者にはたらしかけて特定の事柄に注意を向けさせ、ことばを主な媒介として教えるべき内容を計画的に組織立てて示し、言語的な概念に訴えて分析し、学習者の言語的反応を求めて理解を確かめ、正確に意識化させる。もちろんことばだけというのではないが、基本的な形として言語的提示、言語的反応、そしてフィードバックが教え込みの一サイクルをなす。

これに対して「しみ込み」は、模倣および環境の持つ教育作用に依存する。環境が整っていてよいモデルがあれば、子どもは「自然に」学ぶという前提に立つ。ここでいう環境は、物の環境も含むけれども、より重要なのは人の環境である。人と一緒にいろいろな行動をしているうちに、人について、また人の持っている知識や技能や考えについて、自然に学習してしまう。「門前の小僧習わぬ経を読む」の類である。もちろん物の環境からのしみ込みもある。子どもをとりまく自然環境、遊び場所、遊び道具、ふだん耳にする音楽や目にする美術、読む図書などが子どもの心にしみ込んで跡を残すことはいままでもない。ただこの場合でも、物だけの環境としてよりは人をいわば触媒として、人と物とが一緒になって形成する環境としてはたらく。

(中略)

しみ込みモデルにおいては、教える者—学ぶ者の役割分化があいまいである。技量や習熟度の差はあり、模倣される側とする側の分化はあるにしても、同じ仕事に取り組んでいる。カリキュラムを定め実施する者とそれを受ける者というはっきりした権威の落差がない。ことばによる伝達が少なく、教師からは短い評価と、質問に対する応答が送られるにすぎない。そのかわり教師は弟子と同じ環境で行動し、積極的な模倣を促す。

こういう教え方が成立するためには、教える者と学ぶ者の両者を隔てる距離が少なく、いわば薄い

膜ひとつで隔てられているという意味での同一化 (identification) が前提となる。学習は、学習することを自己目的にした活動のみによってではなく、生活的な活動の中で生じる。学習者が自分の興味や生活的な必要によって行なう自発的な活動の中での偶然学習 (incidental learning) や試行錯誤と、尊敬や愛情の対象となる親や教師や先輩のやり方を身につけようとする模倣 (modeling) と、それを何回も繰り返してそれに習熟する努力とが、滲み込み型の学習を担うのである。

(中略)

教え込みと滲み込みの、どちらのモデルもそれぞれに、長所と問題点とを持っている。

教えなければならぬことを効率的・組織的に教えようとするれば、教え込み型のとりたて指導にならざるをえない。滲み込みは、学習者が何を学習するかについてのコントロールが充分には効かない。教え込みは、組織的・論理的に構成することができるから、明確な目標を達成するにはより効率的である。かつ、ただ形の上でできるようにするだけでなく、どうしてそうなるのかというしくみに入り込んで教えることができる。近代社会が要求する知識や技能を教えるのに、教え込みモデルが主になるのは当然である。

しかし問題点としては、まさにその論理性や効率性が、思考や行動に対するコントロールを効かせすぎるということがある。教育は未知の未来に対して備えるという一面を持つから、たとえ現在の最善のものであっても、そこにあまりきつりとはめ込んではいけない。知識や技能の完成度や、学習者の習熟度によって程度は異なるにしても、いつでも「はみ出し」の可能性を残しておく必要がある。コントロールが効きすぎると、はみ出しがむずかしくなる。

それと関連して、教え込みの人間関係は、どうしても権威関係になる。教師が知識や技能を所有しており、学習者はそれを学ぶという関係は、当事者の意識や人格にかかわらず基本的に権威関係である。そして権威関係の中で流れる情報は、これも基本的に権威の高い方から低い方に流れ、学習者の受け身性がモデルに組み込まれている。

さらに、教師の教える知識は、教師—子どものふたりの関係 (diad) の外側に対象化されている。たとえば行儀を、文字を、数を、科学を、黒板や教科書に象徴されるようにふたりの外側に対象化して、教師がそれを指し示しながら教えることになる。そこでは、ものごとを客体として対象化した知恵と、人との、人と人との関係に関する実践的な知恵のうち、前者を優先し、後者の比重が軽くなる傾向になりやすい。

「滲み込み」はより自然であり、子どもの生活に即している。うまくいけば子どもの自発性に基づく自由な学習が可能になる。しかしその問題点としては、「自然」、特に自然的な人間関係は、権威をもって臨む教師よりもさらに拘束的でありうることをあげなければならない。そして、滲み込みは人間関係における相互依存性を媒介としているので、個人としての学習者の独立はあまり重要視されず、時として邪魔になるように見えることがある。

また、滲み込みモデルのもとの理解の質が問われなければならない。教え込みと比べ言語的伝達

の比重が小さいということは、言葉の上でなく直感的・行為的な支えを持った理解を成り立たせる一方、抽象的分析的な理解や、理解の言語化が不十分なまま一応「できて」しまう可能性をもっている。学習内容が充分意識化されず、「習うより慣れよ」型に傾き、理解や論理性が二の次になるおそれがある。

(東洋『日本人のしつけと教育』東京大学出版会(1994年)から一部抜粋、一部改変。)

**設問** 「教え込み型」と「<sup>し</sup>しみ込み型」、それぞれの長所と問題点を要約しなさい。そして、学校やその他の学びの場面での「教え込み型」、「<sup>し</sup>しみ込み型」の具体例をあげ、それらの長所や問題点も含めて、600字以上700字以内で記述しなさい。(100点)